

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	小 澤 千 紗
主 論 文 題 名				
Resilience and spirituality in patients with depression and their family members: A cross-sectional study (うつ病患者とその家族におけるレジリエンスとスピリチュアリティに関する横断研究)				
( 内 容 の 要 旨 )				
<p>レジリエンスとは、心理的ストレスを経験しても速やかにもとの健康状態に戻る力、精神安定を維持する能力をいい、うつ病を含めた様々な精神疾患の予防や治療に重要な役割を担っている。先行研究にてレジリエンスレベルが高いほどうつ症状が軽度であるとの報告があるが、寛解状態を含めたうつ病患者のレジリエンスの特性について調べた研究はない。また、近年ユダヤ・キリスト教信仰国において、宗教観・スピリチュアリティがレジリエンスやうつ病の予防に対して正の影響を及ぼすことが知られているが、それ以外の地域における研究はない。更に、家族関係はレジリエンスに影響を与える重要な要素だが、うつ病患者の家族のレジリエンスについて調べた研究は見受けられない。以上より、本研究では、うつ病患者におけるレジリエンスについて、うつ病の重症度および宗教観との関連を横断研究によって検証し、患者と家族のレジリエンスについて比較検証した。</p> <p>研究対象者は、国際疾病分類第10版にてうつ病の診断を有するものとし、家族については、患者と同居し精神疾患の既往のないものとした。東京近郊の精神科病院とクリニックにて実施した。抑うつ症状、レジリエンス、スピリチュアリティ、宗教観、自尊感情、認知機能、不安尺度、生活の質、ソーシャルサポートについての評価尺度を用いた。統計学的手法としては、レジリエンス合計点を従属変数とした重回帰分析を施行。寛解群対非寛解群、患者対家族のレジリエンスおよびスピリチュアリティ合計点をt検定にて比較した。更に、患者と家族のレジリエンス合計点の相関を検証した。</p> <p>患者100名、家族36名がそれぞれ本研究を完遂した。両群の人口統計学的特徴では年齢以外に有意差なし。レジリエンス合計点の比較では家族において有意に高値であったが(100.8±25.9 vs. 118.9±22.0, P&lt;0.001)、寛解群と家族の比較では有意差は認めなかった(112.3±17.1 vs. 118.9±22.0, P=0.108)。重回帰分析の結果、抑うつ症状の重症度(P&lt;0.001)、宗教関連施設への訪問頻度(P=0.011)、自尊感情(P=0.014)がレジリエンス合計点と有意な関連を認めた。患者と家族のレジリエンス合計点には有意な相関は認めず、寛解群とその家族のレジリエンス合計点においても同様に検証したが有意な相関は認めなかった。</p> <p>本研究は横断研究であるため因果関係を議論できない点等の限界はあるものの、レジリエンスは特性というより状態の性質を持つことが示唆され、スピリチュアリティや自尊感情を高めるような心理学的介入がレジリエンスを回復させうつ病の改善を促進する可能性が示唆された。また、欧米諸国と同様に日本においても宗教的関心・スピリチュアリティはレジリエンスを構成する重要な要素であると考えられた。</p> <p>家族との検証によって、うつ病患者においてレジリエンスはより個人的な資質によって影響を受ける可能性が示唆された。今後レジリエンスの解明を進め、うつ病の予防や治療に発展できるよう今後も検証を重ねることが期待される。</p>				